
今日も世界のどこかで

かなで

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も世界のどこかで

【コード】

N0358I

【作者名】

かなで

【あらすじ】

短編オムニバス形式。各話完結です。時代背景は色々。暗かったり明るかったり。日常の中の非日常をどうぞ。

a s h o r t c a k e a n d a n e s p r e s s o (前書き)

唇下がりのc a f eとp r o p o s eと殺意。

ショートケーキとエスプレッソを

84・愛と紙一重の殺意を抱き締める

彼は耳許で甘く囁く。

「ねえ、本当に僕のことを愛してるなら、死んでくれないかな？」
其の言葉が脳髓に刻まれた皺の一つ一つに滲みるように広がって、
頭蓋の中で反響する。

にっこりと微笑んでいる彼の柔らかな目は先刻のような言葉を吐いた
人の其れとは思えないほど、温かで、澄んでいて、そして無邪気だ。
おおよそ昼下がりのオープンカフェとは似つかわしくない話題に、
目の前で湯気をたてるハーブティをくるくるかき混ぜながら答える。
「とても、魅力的なお誘いね。」

彼は馬鹿にされたとしても思ったのだろうか、少しムツとした様子
で私の目を見た。

反論しようともいうのか口を開きかけた彼を目で制して、カップ
に口を付けた。鼻腔にひろがるさっぱりとしたハーブ独特の香りを
目を細めて楽しむ。

もう少し落ち着けばいいのに。

そんなわたしの意図が伝わったのか彼も黙ったままコーヒーを飲ん
だ。

(差し詰め、永遠の愛でも証明して欲しいんでしょう?)
口に出しかけた言葉をのんで尋ねる。

「私のことが嫌いなのです?」

なんて白々しいのだろうか。自分が発した言葉に虫唾がはしるよう
な不快感を感じている私の心中には全く気付く様子もなく、彼は焦
ったように弁明する。

「そうじゃないんだ。僕はただ・・・」

口籠るなんて、全く、馬鹿げているにもほどがある。

「何が違うの？もう好きじゃなくなった？」

まるでB級ドラマのワンシーンのよう。ハッピーエンドの裏側では一体何人が溜息をのんでいるかなんてすっかり無視して、ヒロインの幸せばかり追いかける。能天気な結末になど、少しの魅力も感じないというのに。真似事のように詰め寄る自分に嫌悪すら感じる。

「そんな理由ないだろう。僕は、君のことが好きだよ。」

ふうん。一体そうして何人の女を殺してきたのでしょうか。儂げな彼の笑みに騙された女たちに思いを馳せる。みつともない。好きな男のためなら死んでもいい？ほんとうに、馬鹿げてる。否定しながら、あながち満更でもない自分も馬鹿に違いない。真つ黒な心中を表に出さないまま、にっこりと微笑み返す。

「そう。じゃあ、死んで頂戴。」

彼は意表を突かれたかのように一瞬目を見開いて暫くまばたきを繰り返すと、刹那納得したように笑った。死んでくれと頼み合って、そして微笑み合うだなんて可笑しな話だ。互いに笑みを貼り付けたまま相手の出方を窺うように見つめあった。まったく、私が一体何人の男を殺してきたのか、なんてことも別段取るに足らない話だ。「ねえ、ケーキたのんでも良いかな？真つ赤なイチゴの乗った。」急な話題の転換に驚くこともなく、柔和な微笑みを湛えたままの彼はうなずいてウェイターを呼ぶ。

「シヨートケーキとエスプレッソを。」

注文をうけたウェイターは、デートですか？素敵ですねえ。と、見当違いな言葉を残して店内へと戻って行った。有り難う、と言った私に彼は尋ねる。

「永遠の愛は在ると思うかい？」

答えなどとうに知ってるくせに。

「そうね。」

彼を指さして、そして自分を指さし言う。

「貴方が死ぬか、私が死ぬかの違いにすぎないわ。」

私の台詞に満足したのか、彼は至極愉快そうに笑った。私も声をあげて笑った。本当に、愉快な話し合いだと思った。

「君は僕のが好きかい？」

底の無い暗闇のような命題にあつてそれは不釣合いなほど幼稚な質問だった。それでも二人の間においては其処が一番重要なところであつたし、だからこそ正確に答えてしかるべき問題だった。

「うん。だから、今私が死ねばこの愛は永遠に違いないわ。」
最上級の笑みで答えた。

「無論。この世において、の意味で。」

少しの間考えた彼はずっと笑つたままであつた。この世では、と声には出さず口だけで繰り返すと、彼は私を見てうなずいた。

「じゃあ、死んではくれないんだね。」

少し残念そうに言つた彼の様子が可笑しく思えて、私は首をふつた。実際のところ、彼が死ねというのなら本当に死んであげてもよかつた。私の考えは彼の考えと同じで、逆もまた然りだろう。メビウスの輪の如く終わりの見えない命題は、私か彼が、或いは両方が死ぬまで終わらないのだから。首を振つた私を見て、彼は嬉しそうに、そして少し寂しそうに微笑んだ。性質が悪い。騙される女が居るのも頷ける笑みだった。

「その代わり」

儂い笑みを浮かべる彼に向かつて、同じような笑みを浮かべて言い放つ。

「殺して頂戴、それから、綺麗に食べて。」

彼は少し驚いたように見えた。

「僕に cannibalism の趣味は無いんだけど？」

臆病者め。かくいう私にだつてそんな趣味は無いし、出来れば綺麗な佯で死にたい。きつと、私みたいに捻くれた女の肉など不味いに違いない。けれど、少なくとも私は食べられることも、自分の味を知ることもない。死んでるからね。好むも好まざるも、死んだ私の身体はもはや私のモノですらない。焼くも埋めるも沈めるもそして

食べるも、生きている者が決めることであつて私の裁量の範囲外だ。生きるか死ぬかの境界は曖昧かつ明快なのだ。死んでしまえばその後なされる決定に何の異論をはさむことも出来ない。死人に口無。アーメン。どちらにせよ、生きているときにした約束が死んだ後で本当に履行されるかどうかなんてことも、全く、愚問に違いない。

「私を殺して、貴方も死ぬ。それ以上も以下も無いわ。」
言い切つたわたしに彼は首をかしげた。

「貴方を殺してもいいけど、その後で一人で死ぬ自信が無いの。」
湯気の出なくなつたカップを見つめながら言う。琥珀色の水面に映つた自分の顔がひどく切なげに見えた。彼は答えない。3月の風はまだ冷たくて、指先はひどく冷えていた。沈黙の春。は、かのレイチエル^{II}カーソン女史の著作。汚染された大地に健康な草花は芽生えない。真つ黒な愛の果てに一体なにが生まれるというのだろうか。少なくとも、健康的な、いや、真つ当な何か、は生まれまいだろう。それでも、私は彼のことを愛しているし、彼は私のことを愛している。一寸先は闇で、背後にもぼつかりと空いた大きく深い穴しかない。不毛な恋に違いないなんて、出会つた最初の刹那、初めから気付けていたのだ。二人とも似すぎている。私は彼の愛が永遠でないことに怯え、彼は私の愛が永遠でないことに怯えている。お互いにこの世を司る流動性を恐れているのだ。そしてその恐怖を埋めるものが死でしかないということも、お互いに理解しているのだ。シェークスピアの述したロミオとジュリエットならば、まだましだろう。少なくとも、二人とも死ぬのだ。約束は死の後にきちんと履行され、愛は永遠となる。この世では。

真つ白なクリームと真つ赤なイチゴ。
先刻注文を受けたウェイターが興味深そうに、沈黙しあう私たちにショートケーキとエスプレッソを出す。喧嘩をしているとも思つたのだろうか。私、マジックが得意なんですよ。と言うと私の右手と彼の左手をとつた。

もう逃げられない。と、そう思った。ウェイターは驚いた私たちに満足したのか店の奥へと消えた。小指には真つ赤な糸、其の先は彼の小指。運命の糸からは逃れられるはずもない。あきらめたように彼は笑った。私も笑った。傍から見れば馬鹿なカップルが、馬鹿みたいに嬉しがっているだけに見えたかもしれない。それでも、二人には解っていた。これは最期通告なのだ。黙つたまま互いに運ばれてきたものに口をつけた。ふんわりと甘いスポンジに純白のクリーム。真つ赤な唇でかじつた真つ赤なイチゴは溺れるほど甘酸っぱく、麻薬のように甘美にわたしを捕えた。彼の喉元を流れ落ちたエスプレッソは真つ黒に、この上なく熱く、中毒になるほど苦く香つただろう。

「一緒に住まないか？」

と彼は言った。

「プロポーズかしら？」

と私は訊いた。

「どちらかが、どちらかを、殺すまで。」

うなずく以外の選択肢は端から用意されていなかった。どちらかが、どちらかを、殺すまで。死が二人を別つまで。よりも、ずっと正しくて誠実な言葉だと思った。指輪は首輪よりも私を拘束するだろうし、死んだ後相手が本当に後を追うかなんて、存外どうでもいいことなのかも知れなかった。婚姻届は私たちにとっては死への片道切符（どちらにせよ、死は一方通行だけれど）に違いないだろうし、「死んでくれないかな」に始まり「殺すまで」で終わるプロポーズが私以外に通用するとは到底思えなかった。この愛（或いは恋）が死をもって完成されることに異論はなかった。愛する人の手で殺されたい、というのではない。ただただ、彼と私が似すぎていたというだけのことなのだ。問題は愛した俣死ねるとかということではない。

彼は私の薬指に指輪をはめると、其のあまりに冷えた指先に驚いた

のか申し訳なさそうに私の手を両手で包んだ。其の俣手をつないでオープンカフェを出た。その硬く繋いだ手を見たウェイターは会計の間中至極嬉しそうに微笑んでいた。

薬指に輝くこの約束が死をもって完成されることを除けば、私と彼は他と何ら変わらない幸せなカップルに違いなかった。二人の生活が常に死と隣り合わせでも、きつと満足なことだろう。少しも、怖くは無かった。握り合った手は温かかったし、二人の間に笑みは絶えなかった。愛は殺意で、殺意は愛。互いに紙一重の均衡を保ちながら、きつく抱きしめあうのだ。明日だろうが、或いは10年先であるうが、互いの心音が止まる日まで。

84・愛と紙一重の殺意を抱きしめる

t o o h o t i n . . . (前書き)

青年と老人の談話。

t o o h o t i n n . . .

プエルト＝リコは暑い。

15・地球は今日も変わらずに廻る

「例えば、の話だけど。」と教授は前置きを付けて言った。テーブルの上には食べ散らかしたクラッカーのかすや、ワインコルク、食べかけのサンドウィッチにコンビーフの缶。右手には残り少なくなったワインボトルを手にして。教授は正確に言うならば、教授ではない。否、もしかすると本当に教授なのかもしれない。正直なところ、僕は彼の正体についてまったくもって何も知らないのだ。

きちんとした仕立てのスーツやワイシャツには所々に滲みやしわや汚れがついていて、そのどことなくエキセントリックな風貌は、まるで胸躍するような研究に没頭していた研究者が数カ月ぶりに日の光を浴びた其れではないかと思えるほどである。表現するならば“博士”の方が適当かもしれない、それでも何はともあれ僕には“教授”と呼ぶのが相応しく思え、彼もそう呼ばれることに異存はないようであった。

教授は僕のことを「息子よ」だとか（勿論そうではない）「おい」だとか「君」だとか、その時々で適当に呼んだ。例えば教授が僕のことを「でんでん虫」だとか「ピザソース」とか呼んだとしても、自分が呼ばれているとさえ僕に解れば呼び名など二人の間では取るに足らないことだった。

もつともなことに、ここには教授と僕の二人しか居ない。

教授は真つ白な顎鬚を左手の人差し指にくるくると絡ませながら至極面白そうな様子で言った。「世界が逆に廻るとどうなるんだろつねえ。ええ？息子よ。」真つ白な顎鬚とは不釣合いに教授の頬

は皺ひとつなくつるりとしていてピンク色である。目は新しい玩具を与えられた子供のように爛々と輝いている。

教授はとても若くも見えるし、ひどく年寄りのようにも見えるのだ。僕は新しいワインの栓を抜きながら彼の質問に対する答えを考えた。ひどく幼稚な質問のように見えて、やっかいなものである。ワインを零さないように慎重にグラスに注ぎながら、それ以上に慎重に僕は言葉を探した。「非常に面白い問題ですね、それは。」ボトルの先から視線を上げると、教授は僕がきちんと答えるまで何も言わないつもりなのか、鶯色の目で僕をまじまじと見つめ返し、空のワイングラスを突き出した。ぶっきらぼうに差し出されたグラスにワインを注ぎながら、僕は教授の後ろ、ちょうど僕の正面にある鏡を見て教授の真意を察した。

正確には、鏡に映った“あるもの”を見て、だ。

町の中心通りから2つか3つほど離れた通りにあるひっそりとした小道具屋で見つけた“地球儀”は、廻すたびにギィギィと不快な音をたてて僕をまいらせたし、マダガスカルはフランス領のままだった。それでも名状しがたい魅力を持つていた其れに目を奪われて僕は3日続けてその店に通った後、なけなしのお金をはたいて自分の所有としたのだ。決して高価な買い物では無かったが、その日暮しの様な生活をしている僕にとつては大きな買い物だったし、狭くてその上昼間でも薄暗い僕のアパートには些か不格好のようにも思えた。それでも手に入れたいと思うほど、僕には魅力的に思えたのだ。

僕はクッションが硬くなって、何やらわけのわからない滲みが所々についたソファを離れ地球儀を手を取った。そうして、ごちゃごちゃしたテーブルの上になんとかしてスペースをこしらえて其の“

宝物”をそつと置いた。相変わらずそれは廻るとギイギイと軋んだ音をたてたが、その不快なはずの音すら楽しく聞こえるから不思議なものだ。教授は、触りたくてたまらないのだと、いうように顎鬚を忙しなく撫でつけたが僕に頼むのを躊躇っているようだった。(全く、頑固なやつ。) そんな教授の様子を滑稽に、それでも何だか微笑ましいなと思いつつながら見つめると彼は眉間に皺をよせて難しそうな顔をした。

仕方なく先刻の質問に答えようと、「少なくとも、」と僕は言った。何の気なしに地球儀を逆回転させると、嘘のようにあのギイギイがおさまった。「僕は1日のうちに朝が2回来ても、夜が2回来ても困らないな。」

古びた地球儀は、本当は逆に廻りたかつたのだとでも言うように、ゆっくりとそして静かに回転していく。

NYに朝日がさす。ロンドン、ローマ、イエルサレム。ボンベイ、マラッカ、そして東京。別に逆でもさして問題あるまい。モスクワの昼の長さが変わるわけでもなければ、シドニーの夜が長くなることもない。北極にはホッキョクグマがいて、北極星は少しずつ軸から離れる。それだけ。

「ほう。」と少しばかり僕の答えに落胆したかのように、教授は少し溜息交じりにうなずいた。「恒常風の向きが変わって、飛行機は困るでしょうね。」と付け加えた。教授は気にくわなさそうな顔をして、目の前にあったチーズをかじると、「それ、わしはそろそろ戻るとするかな。」と壁に立て掛けてあったステッキをとった。不味いことを言ってしまったのだらうかと頭を掻きつつ床を見下ろすと、空のボトルはゆうに10本を超えていた。その殆どは教授の胃の中へと消えたのである。ワインをしこたま飲んだ者とは思えない

ような俊敏さで教授は立ち上がると、どっしりとした足つきで僕の方まで歩いてきた。

あわてて立ち上がると、教授は少し子供っぽい、はにかんだような顔で、「見せてもらえないかな」と躊躇いがちに訊いた。帰ると言いだした途端、どうしようもなく触れなくなったのだろう。どうぞ、といった時には彼はもうしげしげと古びた地球儀を見つめながら、ふむふむと髭をもごもごさせていた。しかも、僕の座っていたソファにちゃっかりと腰かけて、だ。水でも飲みますか？と訊ねたときには、返事すらもらえないほど、教授は古びた地球儀に御執心のようだった。

キッチンまで歩いて銀色の冷蔵庫から冷えたミネラルウォーターのボトルを2本取り出す。コツコツ、とうるさく踵を鳴らして戻ったというのに彼は気付かないようだった。これほどまでにこの古い地球儀は彼の興味をそそるものなのだろうか。もちろん、僕にとっではなけなしのお金をはたいて買うくらい、魅力的なものだったのだけれども。いくら考えても何の役にも立たないこの古びた地球儀のどこが、どうしてそんなに教授の心を惹きつけるのかは全くもって解らなかった。

教授は実際、何でも持っているのだった。

僕が食べるものが無いと言えば両手にどっさり食料をさげてやってきてくれたし、珍しい道具や楽器なんかもよく見せてくれた。クリスマスには素敵な鞆をプレゼントしてくれたし。（これは本当に重宝している。）コンサートにも連れて行ってくれた。生活に困っている様子なんて一つもないし、それどころか実に裕福なようにみえた。少し気難しいところはあるけれど、知識は僕の知る誰よりも深く、レコードの趣味なんかも秀逸である。おおよそ僕が望みうることなんて全て叶えられる、そんな余裕を彼は持っている。

それなのに、こんな古びたモノのどこが。

先刻まで教授が腰かけていたソファの上に膝立ちになると、締め切った窓を勢い良く開いた。見える通りには人っ子ひとりいないどころか、街灯すらない。おかげで月や星が澄んだ夜空によく見えると言えば聞こえはいいが、一人で歩くには少し不気味に思えて僕はなるべく夜には外出しないことにしていた。夜だというのにむつとした熱気が頬をなぜるのを感じて僕は眉間に皺をよせた。港から吹いてくるその蒸し暑い風に乗って潮の香りがかすかに鼻をついた。部屋を振り返ると、教授は顔を上げてこちらを見た。「さっきの質問なんだが、ええ？」いつもは顎鬚を撫でつけている左手で、地球儀をくるくる廻しながら教授は訊ねた。先程とは違って、僕は答えを知っているような気がした。とても単純でいて、それで複雑な答えだ。「それから」と僕は呟いた。視線を窓の外に戻すと、丁度大きな蛾が目の前を横切った。気持ち悪い模様をした、巨大な蛾だ。

「それから、プエルトリコは暑い。」

実にシンプルで、簡潔なセンテンスだ。ゆっくりと噛みしめるように言い放ったその言葉が、空気と反応して狭い部屋によく響いた。「プエルトリコは暑い。」教授はもごもごと繰り返すと、納得したように大きく頷き両手を打った。

「実に良い答えだ。」

古びた地球儀の上では、僕の立つこの島はとても小さく掠れて薄く

なっている。それでもしつかりと、カリブ海に浮かんでいた。教授の手の中で、地球はくるくると音もたてず静かに、そして逆向きに廻っていた。地球儀からやっと手を離れた教授はミネラルウォーターのボトルを開けると、空のグラスに注いで持ち上げた。「プエルト＝リコは暑い。」

僕も做ってボトルを少し持ち上げ、蒸し暑い空気とは対照的な冷たさを飲み干した。

教授の手の中でいくら地球が逆に廻ったとしても、この世界には何一つ変化はない。北極は寒いし、プエルト＝リコは暑いのだ。そつと窓を閉め、狭苦しい部屋を見回すと教授は目を閉じて規則正しく胸を上下させていた。（性質が悪い。）薄手のタオルケットを探し出してそつと被せ、電気を暗くした。散らかったテーブルに目を向けて、小さく溜息を洩らすと古びた“宝物”を慎重に両手で持ち上げた。

地球はどちらにも廻っていなかった。

15・地球は今日も変わらずに廻る

guilty (前書き)

仄暗い独白。

guilty

20・Nonfiction…
06・26

09・

愛せなくてごめんなさい。

いいえ、愛するなんて言葉をわたしが使うことが既に鳥澁がましい。腹の底も骨の髄も、ありとあらゆる場所が汚染されているに違いない。

真っ黒な夢。真っ黒な心。

愛したい、と願うことすら赦されてはいない。

だって、きたない。

ねえ、望まれないことほど、悲しいことはない。

望まれたと思うことほど、浅ましいこともない。

いずれにせよ、喪失しか残らないのだ。

ばらばらになりそうな、其れを必死で繋ぎ止めて、辛うじて立っている。

繋ぎ止めたいのは、あなたではない。わたし自身。

どろどろのぐちゃぐちゃに融解して、それで排水溝に流れてしまえるのなら本望。

ばらばらの俣では、喉につかえたままの棘すら抜けない。

嗚咽に塗れて息を殺しても、死ねないのだ。

なんて面倒なおんな。

しねばいいのに。

しめゆつきすらないのに。

あなたの期待に答えられなくてごめんなさい。
いいえ、期待すらされていなかったのかもしれないね。
わたしは誰の為にも何かを為すなんてことはできない。
“為”等と口にすることすら恐れ多いのだ。
何も聞きたくない耳。何も見たくない目。

どうか、幸せで。と祈ることすら赦されてはいない。
だって、きたない。
ねえ、望まないことほど、難しいことはない。
望むと云うその行為すら、あなたをけがしてしまう。
どちらにせよ、いちばんきたないのはわたし。

信じることが、とてつもなく恐ろしい。
あなたが信用できないのではなくて、わたし自身が醜いせいだ。
裏切られるのは世界が悪いのではない。
世界に善悪なんて元より存在しないのだから。

殺して戴けるのならば本望。
どうかどうか、ぐちゃぐちゃのどろどろに溶かして。
そうしてコンクリートに詰めて地中深く埋めて下さい。
ならば、きつと、なにも汚さずにすむから。

そう、こう願うことも、浅ましくて仕方ないのです。

何も要らない。
何も要らない。
何も要らない。

言い聞かせて叱責して殴打して、
この身体を切り裂いて真っ黒な中身を全部引きずり出して、
そうすれば、少しは漂白されるのか。

結論は見えているのだ。

しねばいいのに。

ザツツオール。

なんて面倒なおんな。醜いおんな。浅ましいおんな。

生きていてごめんなさい。

しねなくてごめんなさい。

のぞんだりしてごめんなさい。

うまれてきてごめんなさい。

要らない。

と言われることは、とてもとても哀しい。

涙だって出ないくらいに哀しい。

体中の水分が総て流れ出すくらいに泣き喚いて、
このどろどろの臓物に溜った真っ黒な澱が流れ落ちてしまえばいい
のに。

泣くときは静かに、ひとすじだけ。

しねばいいのに。

その通り。しねばいいのだ。

あなたの望みを叶えられなくてごめんなさい。
わたしには其の様な勇氣はないのです。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

死ぬために生まれてきたのに。

若し貴方が刃をつきつけるのならば、喜んで受け入れましょう。

わたしには、其れくらいしかできないのです。

なんにもない。からっぽのわたし。

あなたにあたえることはおるか、うばうことしかない。

さわってくれなくていいよ。

あなたまでけがれるひつようはない。

だって、わたしはきたないから。

細胞のひとつひとつに原罪を抱えている。

穢れているのだ。なにもかもが。

あなたから損なうことしかできない。

からっぽでごめんなさい。

わたしなんかにわらいかけなくていいよ。

あなたのえがおはそんなにやすくはないはず。

わたしになんかはなしかけなくていいよ。

あなたのくちはそんなもののためにはない。

なんてきたない。

なんてあさましい。
なんておろか。

あいするなんて、赦されるも何も、端からないのだ。

うまれてきてごめんなさい。

あなたのまえにあらわれてごめんなさい。

あいそうなどとかんがえてごめんなさい。

どうかどうか

わすれてください。

にどとあなたのまえにはあらわれないから。

ごめんなさい。

ねえ、どうして、こんなにもあさましいのだろう。

こんなにもきたないというのに

こんなにもけがれているというのに

たったひとつだけねがえるならば、

あなたがしあわせでありますように。

それいじょうもいかもない。

わたしはきつとあなたをふこうにしてしまっ。

のぞまれていないから。

のぞんではいけないから。

だいじょうぶだよ。

ないたりしないよ。

だつてなみだもでないもの。

つよい、とか

よわい、とか

きれい、とか

かわいい、とか

みにくい、とか

きらい、とか

すき、とか

あいしてる、とか

ありがとう。

どんなことばでもいい。

要らない。

と言われるよりは、

嫌い。

と言われる方が何倍もうれしい。

あいしてほしい、とか

わたしをみて、とか

望んではいけないのに。

つまるところ、

失ってしまった“何か”は

損なわれたまま戻らないのだ。

ぽっかりと空いたまま

こんなにも欠落だらけの私は、

欠乏しているから、
あなたから総て奪ってしまおう。
そうにちがいない。
でなくとも、
あなたを損なってしまうだろう。

愛そうとなんかして、ごめんなさい。

あなたは
わたしからすれば
まぶしすぎるのです。

だって
なけるでしよう？
わらえるでしよう？
ひつようとさせているでしよう？

そして
あいせるでしよう？

ほんとうは
逃げているだけだなんて
わかってる

あいするしかくなんて
かんがえるひつようもなく

ひつようとされてなくても

いきでいけばいいし

けがれているにしても
いわなくてはわからない

そう、にげているだけ。なのだ。

すべての元凶はわたしに在って
欠落は欠損を呼び、
まんなかを失くしてしまったのだ。

ドーナツの穴のようにぼっかりと
抜け落ちた空虚に何があったのかを
わたしは思い出せやしない

あのひあのとときあのばしょで
失ったのは一体なんだっただろう
もうその影すら追えない

ねえ

ずるいよ

ずるい

なぜ貴方はわらっているの
なぜわたしはわらえないの

若し貴方がわたしを
すこしでいいからあいしてくれただなら
わたしはすぐわれたのに

まえにすすもつとすればするほど
貴方の影がちらついで
わたしは竦み上がってしまう

わかっているよ

わるいのは貴方ではない
わたしがわるい

ごめんなさい。

貴方を見抜けなかった
わたしがわるいのです。

しんじてたのに、とか
すきだったのに、とか
どうして、とか

あいしてほしかった、とか
わたしをちゃんとみて、とか

そんな陳腐な言葉では言い表せられない。

けつきよく

貴方はわたしをみてたのではない
わたしにさわっていたのではない

ワタシ

を触っていたんだ。

何度洗っても
何度吐いても
何度擦っても
何度嘆いても

消えないのだから

どうしたらすすめるの？
どうしたらたおれずにすむの？
どうしたらわらえるの？
どうしたらなけるの？

ねえ

貴方は既にわたしの細胞の一部となって
内からわたしを凌辱して汚すのだ
内に巢食う貴方の遺したものが
あなたまで穢してしまいかもしれない

こわい

こわいよ

もう失いたくない
これ以上損なえば
ほんとうにはらばらにほどけてしまいそうだ

いつたいどこで
掛け違えたのだろうか

いつたいどこで
踏みはずしてしまったのだろうか

貴方だけがりゆうではないはず

ほんとうに、

ほんとうに、

君には

すぐわれたというのに

君を穢すのがこわくて

そのあまり

にげてしまって

ごめんなさい

君に知られる前に

逃げてしまって

ごめんなさい。

わたしを救おうとしてくれたのに

其の手を握れなくてごめんなさい。

ねえ

ほんとうに

かんしゃしているんだよ。

たぶん

君がいなかったら

今わたしは

きつと

此処に立ってはいない。

だからどうか、

君は幸せに

どうかどうか

いつまでも幸せでありますように。

ねえ

それでも

やっぱり

要らないって言われるのは
いちばんつらいことだよ

君に救われたとしても
貴方を赦せたとしても
自分を浄化できたとしても

其の声。

たった4つ文字で

ひとは

こんなにも

絶望できるんだね

つもりつもって

欠落に欠損を

欠損に欠乏を

塗り重ねて

そうやって

積み上げたジエンガは

すぐに崩れてしまう。

さようなら。

ごめんなさい。

ありがとう。

おげんきで。

どうか幸せに。

おかしかったんだ

なにもかも

一度狂い始めた歯車を

元に戻す手立てが解らないだけなんだ。

狂った俣進んで、進んで、

何時かはばらばらに壊れてしまいかもしれない。

だからどうか

そんな日には

すこしでいいから

ほんのすこしでもいいから

わたしをみてください

あなたがしたこと、いったことで

わたしが奈落の底へ落ちていったとしても

決して決して

あなたが悪いのではないのです

受け止めて

噛み砕いて

咀嚼して
消化して
吐き出せなかった

わたしが悪いのです。

だからどうか
気に病まないで
わたしが息を止めたとしても泣かないで

あなたの涙は
きつときつと
ほかのだれかのためにあるのだから

20. どうしてとなぜを繰り返して

n o d r e a m (前書き)

過去と現在の狭間でもがく。

n o d r e a m

a . m .

6 2 . 固く瞑った目蓋の裏で啼いた

訪れた真夜中の闇、その静寂。静まり返る部屋にひとり佇んで周りを
見渡す。

きん、と響くその静けさと耳鳴り。紛らわすように頭を働かせる。

時刻は既に日付を変えて、カレンダーの上に規則正しく並んだ数字
をパズルのように黒く塗り潰す。

カウンターの上の観葉植物は水を求めて渴いた土の奥深く根を伸ば
し、

壁にぶつかってはその狭い箱庭のような鉢の中でその身を伸ばそう
とする。

サイドボードに置いた電光表示の無機質な時計のアラームは明日も
6時に鳴る。

至極単純なことだ。

憂鬱な平日。

溢す溜め息すら聞き慣れたものだ。

読書灯はぼんやりとしたオレンジを放って、

目を落とす新聞記事が少しずつばらけるような、そんな感覚に墮ち
る。

被害者の証……では……が……器を……。……目撃……もし……
……あ……、……よ……。……様。

目を細めて繋ぎ止める。意識の縁にすがり付いて足を宙にはたつかせる。
水に沈みこむ寸前で暴れ喘ぐような滑稽な様相が脳裏に浮かんで沈む。
ふわり、ふわり。オレンジが揺れる。

質の悪い紙の上で昨日の出来事は時を止めたまま動かない。
紙面の上に羅列されたその文字列の上では、
子供を失った母親の叫びも、選挙に勝って歓喜にわく候補者の笑みも希薄だ。
何の価値も見出せない。

物事は起きたその刹那終わる、生まれながら朽ちる、生まれ落ちる
其の一瞬から既に過去を生きるのだと、
君は唸るように溢した。そんな風にして繋ぎ止めたその端から離れてしまう、とも。

例えば、星を繋げば物語が生まれるように、君と私を繋げば新たな
ストーリーが綴られれば良かったのに。

離れてしまっんだ。

サイドボードの引き出しを開け、百均でよくあるような安っぽいク
リアファイルを取りだす。
何度も開けすぎて場所は覚えてしまったその位置に親指を差し込んでそつとビニールを捲る。

色褪せた記事を指先でなぞる。
色褪せた君の名前。

もう繋がることは、無い。と、そう、思う。
あの地に響くような声を聞くことも、無い。

文字列になった貴方はもう遠すぎて、なぞる指先からどんどん離れてしまう。

君の云ったあの言葉は、君という確かな実証をもって私に迫る。

ああ、ほんとう。この世には、不確かなものばかりだ。

永遠の定義が終わらないものだとしたら、そんなものはあり得ない。
あたしたちに与えられた時間は不平等で、それでもその歩みは無情にも等しい。

身体が朽ちれば想いは終わる。

魂の永続性など考えたくもないし、存在すら曖昧だ。
不確かすぎる。

何もかもが事実で、
何もかもが虚実だ。

もう瞳を閉じなければ。

明日もアラームは6時に鳴り、出来るのはただ空虚な世界を生きてゆくことだけだ。

それに反して君は明日も過去で、だからこそ確かだ。
哀しいことに、だ。

いつからなんだろう、泣くことさえ忘れてしまった。どうして。

思い出は薄れてしまう。
どうして。過去さえも確かではないというの？

とまらない思考回路。

絶望的展開。

これ以上惑わないように、堅く目を瞑って唇を噛む。

確かなものなど、何一つ無い、と。

欠伸を一つ噛み殺して、大きく背を反らす。過去は引出しに仕舞って、また暫く眠りにつかせる。

観葉植物には霧吹きで水を。オレンジは消さずに布団に潜り込んで目を閉じる。

ゆっくりと漆黒の闇へ浮遊する意識。
夢など見ませんように。

明日もアラームは6時に鳴る。

62・固く瞑った目蓋の裏で啼いた

goodbye cuz i love u (前書き)

最初で最後の恋文。

g o o d b y e c u z i l o v e u

ラストラブレター

68 . それではどうかお元気で

どうか其の俣 振りかえらずに聞いて下さい。

私はとても愚かな女。浅ましい臆病者。

失くすことを怖れて捨てる。

繋ぎ止めることは格好悪い、と。

後悔するのはどちらかだなんて明白なのに。

まだ戻れるなんて軽々しく思うほど子供ではないし、

もう後がないと必死になるほど大人でもない。

ましてや私は「ずっと」だとか「永遠に」だとか

そんな不確定要素を信頼することは出来ないし、

好き嫌いよりも利益を優先してしまうような人間。

此の両の手の中には何も残りはしない。

自分で手放すことを選んだくせに、

掴むモノの無い手を見て寂しく思うだなんて

どこまで浅はかで愚かでみっともない。

今、貴方に縋りついて泣いて、

「行かないで」なんて言えそうにもない。

そんな可愛い女の子にはなれそうにもないし、

下らないプライドがそんなこと許す筈もない。
泣きたくても涙すら出ない。

貴方が微笑んだ日も、泣いた日も、怒った日も、
私はその日を失くす時のことばかり考えた。
最悪の日を迎える夢しか見れない。

目を瞑って 口を閉じて 耳を塞いで

そうでなきゃこの世界で立って居られそうもない。
プライドを持つ器すら持ってないのに、

どうかしている。

なんで、

こんな自分、いつもなら鼻で笑って見下して進んで行けるのに。

笑えないよ。泣けないし。動けない。

届かない、なんてことは毛頭解っていた筈。

解り合うことなんて決して無いのも知っていた。

なのに、「解ってほしい」とか「傍にいて」とか
求める自分が嫌いで堪らなかつた。

だって、そんなことわるわけない。

叶うことなら願ったりしないでしょう？
なのに祈るなんて馬鹿げている。

此れ以上愚かな存在には成りたくなど無い。
欲しいものは失いたくないから求めない。

弱くなんか成りたく無いのに、
世界に1人きりになっても平然として居られる、
そんな存在で在りたいのに。

孤独は世界の中に在るんじゃない、
自分が創り出すものだから。

他を求めたりするから、孤独を感じてしまっただよ。
“求める”自分には嫌気がするというのに。

なんて愚かなのだろう。

私が好むのは絶対的で不変的なモノ。

否、そうじゃない、

きつと比較するのを怖れているだけだ。

不安定要素は全て排除して生きていきたいのに、
此の世界の根幹を成すのは流動性だ。

たった1つでいいから、

変わらないモノが、

在ればいいのに。

此の世界に変わらないモノ等、何一つ無い。

目を開いて 口を開けて 耳を澄まして

知っているんだよ、解っている、

貴方は変わる。

私も変わる。

這い蹲つてでも生きて行かないと。

明日になれば、

嘘だらけの今日に気付くかもしれない。

真実は結局のところ誰にも解らず仕舞いだし。

失くして初めて其の大切さに気付くのかな。

そうだとしたら、ねえ、

すごく寂しいよ。そして、途方もなく怖い。

信じることは余りにもリスクが大きすぎる。

こんなこと言っておいて、

それでも未だ、“信じたい”なんて馬鹿げているけれど、
貴方と過ごした日々は真実だったって、信じてる。

行く先は違っけれど、いつかもう一度交われたらいいな。

有り難う。お元気で、さようなら。

68 . それではどうかお元気で

d o n o t k n o w w h a t . b u t i k n o w t h a t i

秋の夕暮れ。

do not know what . but i know that i

サンセット・ノスタルジア

89 . 吐いた吐息が真白になる前に

「秋になると悲しくなるの。」

と、彼女は言った。僕は一瞬不意を突かれて、彼女の手を離してしまった。とても小さくて、そして冷えた手だ。離してしまつたら戻つてこないような気がして、僕は彼女の手をいつも握っているのだつた。彼女はそんな僕の様子に振りかえると、少し困つたように眉根を下げて微笑む。

「貴方と別れたいとか、そういうことじゃないのよ。」

僕は彼女の言う意図が解らずに、戸惑いながら彼女の手を握り直した。其の手はやはり、小さく冷えていたが、先刻の其れとは別のものであるように思えた。いや、変わったのは僕の持つ彼女へのイメージなのかもしれない。“秋になると悲しくなる…?” 秋、哀しい。哀しい、秋。哀愁? 疎外感? sentimentalism? 纏まらぬ思想を諦めると、何も気にしていないふうを装つて彼女に真意を訊ねた。

「それは、何か理由があるのかな?’

何時ものように、素っ気なく言い放つたつもりが、機嫌が悪いようになつっけんどんな言い方になって、彼女は少しだけ笑つた。少し気恥ずかしくなつた僕は、ごほん、と咳払いをして続いて訊ねた。

「何か哀しい思い出があるとか:?’

彼女は暫し瞬きを繰り返すと、ううん、と首を振つた。一体、どうということなのだろうか。彼女が首を傾げて考え込む姿は1枚の絵画のように見えた。そんな彼女の頭の上に色を失つた葉が舞い落ちる。

彼女のブーツの踵が舞い落ちた葉の上を踏む度、乾いた音が響く。

「ううん、私が言いたいののは、もっと、ニュアンス的なことなの。」

少しずつ冷たさを増してきた秋風が木々の間を吹き抜けて彼女の髪を揺らす。それを少し煩わしく思ったのか、彼女は眉をしかめると髪を掻きあげた。ふわり、と香るシャンプーの匂い。その髪に枯れ葉が一枚絡まっっているのを見つけて、僕は手を伸ばした。

「例えば、この枯れた葉がなんとなく哀しくさせる、とか？」

彼女の細い髪の毛に絡まった葉は、握りしめるとすぐバラバラに壊れてしまいそうに見える。そんな葉を道に捨てて、勢いよく踏み出した右足の先で同じように枯れた落ち葉が舞う。少し思案しているのか何も答えない彼女を見て、言葉を紡ぐ。

「例えば、あの赤い実、遠く澄んだ空、緑の苔、君のブーツ、エトセトラ。」

1つ1つを指さしながらおどけると、僕の指を捕まえて君は笑った。「例えば君の声。エトセトラ。」

僕の指はまぎれもなく自分の方を指していて、可笑しくなって僕も笑った。

そうして暫らく笑ったあと、真面目な顔をして彼女は言った。

「全てよ。」

ああ、そういうことか。

夕陽はもうすぐ沈む。

89・吐いた吐息が真白になる前に

l i e l i e l i e (前書き)

嘘と本当の狭間。

lie lie lie

真夜中は嘔吐き

72 . 昨日にそつと御別れをして

あなたが居るからわたしは輝くのよ、と君は言う。
だからわたしの前から消えないで、とも。

どうか、どうか。お願いだから。

優しい光で君は笑う。

朝靄に霞む街の向こうに、そうしてかえってゆくのだ。

僕はその度哀しくなって、でも、それでも、君の言葉が嬉しくて。
ほんの少しの動揺を隠すように、小さくふるえる。

僕らはいつだって傍に居るのに。

これ以上は近づけなくて、でも、離れることもできなくて。
お互い引かれ合っているというのに、交わることはないというのだ
ろうか。

繰り返し同じように流れる日々の中で、君は夜毎に輝きを失っ
てゆく。

出会った日のほんの微かな輝きは、日を追うごとに鋭さを増してい
たはずなのに。

ある晩僕を強く、強く、その光で照らしたかと思えば、静寂の向こ
うに霞みだして。

僕の想いだけは、広大な大地に積もる雪のように、ただひたすらに
深さを増して。

愛してる。愛してる。愛してる。

そして、真白な朝が来る。

君は最期のひとすじで僕に笑う。

ごめんなさい。どうかお元気で。

なんて罪深い！

次の宵には君は現れない。

輝きを失ってしまった君は、僕の愛した君は、もう帰らないのだから。
うか。

やがて夜は明けて、君の居ない朝が来る。

なんて白々しい！

こんばんは、はじめまして。

全て忘れた君は、嘆く僕の前に、知らない顔をしてまた現れる。
ほんの少しの輝きを取り戻して、いつものように笑う。

そのやわらかな光でまた僕を惑わすのだ。

全てわすれたくせに！

僕のことなんか！

君のことなんか！

愛してた！愛してた！愛してる！

だって、どう足掻いたって僕は君から逃れられなくて。
同じように、君は僕から離れられないのだ。

27 日と 7 時間と 43・2 分のそのサイクルで、君は僕
の前に現れては消えゆく。
消えたかと思えば、素知らぬ顔でまた現れるのだ。

哀しく無い、といえは嘘になってしまう。
僕に背を向けるのはいつだって君のほうなのに。

愛した君に。

さようなら、はじめまして。

愛する君に。

新しい君と、新しい夜が来る。

72・昨日にそっと御別れをして

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0358i/>

今日も世界のどこかで

2010年10月28日06時39分発行